

# 研究拠点形成事業 平成24年度 実施計画書

## A. 先端拠点形成型

### 1. 拠点機関

日本側拠点機関:	京都大学野生動物研究センター
(マレーシア)拠点機関:	マレーシア・サバ大学
(ブラジル)拠点機関:	国立アマゾン研究所
(インド)拠点機関:	インド科学大学

### 2. 研究交流課題名

(和文): 大型動物研究を軸とする熱帯生物多様性保全研究

(交流分野: 生物学、生態・環境、基礎生物学)

(英文): Conservation research of tropical biodiversity centering on large animal studies

(交流分野: 生物学、生態・環境、基礎生物学)

研究交流課題に係るホームページ: [http:// www.wrc.kyoto-u.ac.jp](http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp)

### 3. 採用期間

平成 24 年 4 月 1 日 ~ 平成 29 年 3 月 31 日

( 1 年度目)

### 4. 実施体制

#### 日本側実施組織

拠点機関: 京都大学野生動物研究センター

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名): 野生動物研究センター・センター長、幸島司郎

コーディネーター (所属部局・職・氏名): 野生動物研究センター・センター長、幸島司郎

協力機関: 京都大学霊長類研究所

事務組織: 京都大学研究国際部研究推進課、野生動物研究センター事務室

#### 相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名: マレーシア (Malaysia)

拠点機関: (英文) University Malaysia Sabah

(和文) マレーシア・サバ大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名): (英文) Institute for Tropical Biology and Conservation, Director and Associate professor, Abdul Hamid AHMAD

協力機関：(英文) Sabah Foundation

(和文) ヤヤサンサバ財団

協力機関：(英文) Malaysia Science University

(和文) マレーシア科学大学

協力機関：(英文) Plau Banding Foundation

(和文) プラウバンディング財団

協力機関：(英文) Orang Utan Island Foundation

(和文) オランウータン島財団

経費負担区分 (A型) : type 2

(2) 国名：ブラジル (Brazil)

拠点機関：(英文) National Institute for Amazonian Research

(和文) 国立アマゾン研究所

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Laboratory for Aquatic Mammal Study,  
Professor, Vera Maria Ferreira DA SILVA

協力機関：(英文) ありません

(和文)

経費負担区分 (A型) : type 2

(3) 国名：インド

拠点機関：(英文) Indian Institute of Science

(和文) インド科学大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Center for Ecological Sciences,  
Chairman and Professor, Raman SUKUMAR

協力機関：(英文) ありません

(和文)

経費負担区分 (A型) : type 2

## 5. 全期間を通じた研究交流目標

ボルネオやアマゾンの熱帯雨林など、熱帯生物多様性の重要なホットスポットを有するマレーシア、ブラジル、インドの3国は、いずれも経済的・歴史的に日本と関わりが深いばかりでなく、近年の著しい経済発展と開発のため、生物多様性の保全が緊急の課題となっている点、自力での多様性保全の機運が高まっている点で共通している。熱帯生態系の多様性保全には、ゾウやトラ、オランウータン、イルカ、ワシなど、大型動物の研究と保全が重要な意味を持つ。これらの多くは、その種を守る事が他の多くの生物や環境を守る事

につながるアンブレラ種であると同時に、森林伐採などに代わって地域経済に貢献可能なエコツーリズムで、その生態系のシンボルとして重要となるフラッグシップ種だからである。しかし熱帯諸国では、まだ研究者が少なく、熱帯諸国間の研究者交流も希薄である。京都大学野生動物研究センターと霊長類研究所は、これまでこれら3国でオランウータンやイルカなど多様な野生動物の行動・生態研究で大きな国際的成果をあげてきた。本計画は、これまでの交流実績をもとに、日本と相手国研究者、特に若手研究者や大学院生が対等な関係で、1) 日本が得意とする先端研究技術を駆使した大型動物の行動・生態・保全に関する共同研究、2) 野生動物の研究・教育・保全はもちろん、COP10名古屋プロトコルの実現に向けたエコツーリズムによる地元の経済活性化と環境保全にも貢献できる自然生息地に直結した「理想の動物園・水族館」の整備。3) 日本が仲立ちとなった熱帯諸国間の研究者交流と共同研究を推進することによって、熱帯生物多様性保全に関する国際研究協力ネットワークを構築することを目標としている。成長著しい生物資源大国であるこれら3国と日本が対等な関係で研究交流することで、生物多様性保全に関するユニークな国際貢献を果たしたい。

## 6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

平成24年度から開始。

## 7. 平成24年度研究交流目標

※本事業の目的である「研究協力体制の構築」「学術的観点」「若手研究者育成」に対する今年度の目標を設定してください。また社会への貢献や、その他課題独自の今年度の目的があれば設定してください。

平成24年度の具体的な研究交流目標は以下のとおりである。

マレーシアでは、マレーシア・サバ大学等との連携をはかり、ボルネオ島の自然保護区やマレー半島のベラム・テメンゴール森林保護区で、野生オランウータン、ゾウ、バク、トラ、ワシなど、大型動物の研究を、インドやブラジルの研究者の協力も得ながら共同でおこなう。ブラジルでは、国立アマゾン研究所との連携をはかり、アマゾンカワイルカやマナティー、コビトイルカなど、アマゾン川の水生哺乳類を初めとする各種哺乳類についての共同研究をおこなう。インドでは、インド科学大学との連携をはかり、ゾウや絶滅危惧イヌ科動物であるドール等に関する共同研究を行う。

日本では、相手国若手研究者を迎え入れて、野生動物研究センターが霊長類研究所の協力を得て、国際セミナーをおこなう。この国際セミナーとあわせて、研究技術向上を目指した研修の初回を、野生動物研究センターと霊長類研究所の施設および連携動物園・水族館の施設で行う。

一方、連携先の国外の持ちまわりで毎年1回開催するものとして、平成24年度は、ブラジルのマナウスで野生動物保全に関する国際ワークショップを開催する。

こうした具体的な努力をもとにした研究交流目標について述べる。野生動物研究センターは、野生動物を研究した大学院卒業生や、若手研究者が将来活躍できる場となることを想定して動物園・水族館、野生生物保全施設と連携を深めている。おそらく近未来に、内外の動物園・水族館や野生生物保全施設職員など、野生生物保全関連職種に就くには、マレーシア、ブラジル、インドのような海外での実地の研修や研究経験が、評価さらには義務付けられることになるだろう。そうした職業機会の増大も視野に入れて研究協力体制を構築することが肝要だと展望している。すなわち、本事業によって育成された若手研究者が、動物園・水族館を含む野生動物保全関連職種に就くことによって、本事業によって構築した研究協力体制を維持・発展できると期待している。

とくに若手育成について述べる。日本の大学院生ならびに若手研究者にとっては、マレーシア、ブラジル、インドの対応機関と各国の調査地が、野外実践経験の場として有効に機能するだろう。さらにはそれが日本と相手国の若手研究者の育成にもつながる。相手国側の若手研究者の視点でいえば、日本に派遣されて、自国では学びえない多様な研究に触れ、さらに自国で野外研究の実践を積むことができる。彼らは将来、京都大学の研究協力者あるいは卒業生、学位取得者として、日本との学術交流の礎になると期待される。

平成 24 年度を初年度とする取り組みの先の目標としては、京都大学の大学院教育のなかに野外研究の伝統とマレーシア、ブラジル、インドなど、海外での実地研修を単位制度として取り込む。同様に、相手国の大学についてもそれと対応したシステムを構築する。熱帯生物多様性のホットスポットを持つこれらの新興経済国と日本が、友好的な関係を保ってきた歴史性を生かして、それぞれの国にあるものを活かして相互補完的に、イコールパートナーとして、あたらしい野生動物研究を展開するとともに、頭脳還流の仕組みをつくることを目標とする。

## 8. 平成 24 年度研究交流計画状況

### 8-1 共同研究 (マレーシア)

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	平成 24 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) マレーシアにおける熱帯生物多様性保全 (英文) Conservation of tropical biodiversity in Malaysia				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授 (英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto University, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Abdul Hamid AHMAD, Institute for Tropical Biology and Conservation, Director and Associate professor				
交流予定人数 (※日本側予算によ	① 相手国との交流				
	派遣先	日本	マレーシア		計

らない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	派遣元	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本 <人/人日>		8/480		8/480
	マレーシア <人/人日>	4/120			4/120
	<人/人日>				
	合計 <人/人日>	4/120	8/480		12/600
② 国内での交流		人/人日			
日本側参加者数					
22 名	(12-1 日本側参加研究者リストを参照)				
(マレーシア) 側参加者数					
7 名	(12-2 相手国 (マレーシア側参加研究者リストを参照)				
( ) 側参加者数					
名	(12-3 相手国 ( ) 側参加研究者リストを参照)				
24年度の 研究交流活動 計画	<p>ボルネオ側と、マレー半島側で、それぞれ共同研究をおこなう。それぞれについて述べる。</p> <p>ボルネオ側：対応するのは拠点機関のマレーシア・サバ大学である。ハミド、ヘンリーの両教員が対応する。ボルネオ熱帯生態系の野生動物保全研究をおこなう。具体的には、バンテン (野生ウシ)、センザンコウ、オランウータン、ヤマアラシ、ジャコウネコ、カワウソ、が研究対象である。主要な研究メンバーは、松林尚志 (サバ大准教授、京大 WRC)、久世濃子研究員、金森朝子研究員、に加えて、大学院生の松川あおい、中林雅、小林俊介。さらにキナバタンガン流域で、松田一希、ダナムバレイ・フィールドセンターで半谷吾郎である。</p> <p>マレー半島：マレー半島熱帯林の野生動物保全研究をおこなう。オランウータン、マレーバク、ゾウ、コウモリなど。林美里、黒鳥英俊、田和優子、ベルコビッチ、ヒルが主要な研究者である。</p>				

<p>24年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>ボルネオ島の側では、バンテン（野生ウシ）、センザンコウ、オランウータン、ヤマアラシ、ジャコウネコ、カワウソの研究が進み、こうした大型動物がアンブレラ種であることから、これらの研究を軸とした熱帯生物多様性研究とその保全計画について一定の展望が開ける。</p> <p>マレー半島側では、オランウータン、マレーバク、ゾウ、コウモリの研究が進み、ここでも熱帯生物多様性研究が進む。</p> <p>とくにオランウータンはフラグシップ種である。ボルネオのダナムバレイで野生オランウータンの研究が進展し、一方のマレー半島でその野生復帰プログラムが進むと期待できる。</p>
--	--

### 8-1 共同研究（ブラジル）

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 24 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) ブラジルにおける熱帯生物多様性保全				
	(英文) Conservation of tropical biodiversity in Brazil				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授				
	(英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto University, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Vera Maria Ferreira DA SILVA, National Institute for Amazonian Research, Professor				
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先 派遣元	日本 <人/人日>	ブラジル <人/人日>	<人/人日>	計 <人/人日>
	日本 <人/人日>		4/240		4/240
	ブラジル <人/人日>	4/120			4/120
	<人/人日>				

	合計 〈人／人日〉	4/120	4/240		8/360
	② 国内での交流 人／人日				
日本側参加者数					
9 名	(12-1 日本側参加研究者リストを参照)				
(ブラジル) 側参加者数					
4 名	(12-2 相手国 (ブラジル) 側参加研究者リストを参照)				
( ) 側参加者数					
名	(12-3 相手国 ( ) 側参加研究者リストを参照)				
24年度の 研究交流活動 計画	<p>ブラジルでは、国立アマゾン研究所のダジルバ教授を主たる対応者として、アマゾン熱帯生態系の野生動物保全研究をおこなう。ここにおけるアンブレラ種は、アマゾンカワイルカ、コビトイルカ、マナティー、などの水棲哺乳類である。また、霊長類についても多様な新世界ザルがいる。とくに道具使用や社会行動において南米の類人猿ともよばれるキャプチン（オマキザル類）を対象にした研究について予察をおこなう。主要な日本人研究者は、森阪匡通特定助教と、大学院生の佐々木友紀、吉田弥生、菊池夢美（マナティーを担当、東京大学大学院農学生命科学研究科農学特定研究員）である。</p>				

<p>24年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>研究代表者である幸島司郎が、ブラジルの国立アマゾン研究所のダジルバ教授とすでに緊密な連絡をとっており、共同研究とともに平成24年度には国際ワークショップをブラジルで開催することに合意した。そこで、国際ワークショップの準備を兼ねた研究交流活動が展開することで、次年度以降の交流の基礎が築かれると期待される。とくに、アマゾン熱帯生態系の野生動物保全において重要なアンブレラ種である、アマゾンカワイルカ、コビトイルカ、マナティーなどの水棲哺乳類や、霊長類のなかでキャプチン（オマキザル類）を対象にした研究について野外研究が進展すると期待される。</p>
--	--



8-1 共同研究（インド）

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 24 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) インドにおける熱帯生物多様性保全				
	(英文) Conservation of tropical biodiversity in India				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授				
	(英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto University, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Raman SUKUMAR, Indian Institute of Science, Professor				
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先 派遣元	日本 〈人/人日〉	インド 〈人/人日〉	計 〈人/人日〉	
	日本 〈人/人日〉		4/240		4/240
	インド 〈人/人日〉	3/90			3/90
	〈人/人日〉				
	合計 〈人/人日〉	3/90	4/240		7/330
② 国内での交流		人/人日			
日本側参加者数					
11 名	(12-1 日本側参加研究者リストを参照)				
(インド) 側参加者数					
3 名	(12-2 相手国 (インド) 側参加研究者リストを参照)				
( ) 側参加者数					
名	(12-3 相手国 ( ) 側参加研究者リストを参照)				

<p>24年度の 研究交流活動 計画</p>	<p>インドでは、インド科学大学の生態科学センターのセンター長であるスクマール・ラマン教授を主要な対応者として、研究交流活動をおこなう。これによって、インドにおける熱帯生態系と野生動物保全研究をおこなう。具体的には、ドールと、オオカミと、アジアゾウを研究対象にする。野生動物研究センターの大学院生である澤栗秀太がドールの研究をおこない、植田彩容子がドールとオオカミの研究をおこない、安井早紀がアジアゾウの研究をおこなう。またゾウについては、日本のゾウ研究の第一人者である長谷川寿一（東京大学）、長谷川真理子（総合研究大学院大学）の助言も得て、インドのアジアゾウの研究をおこなう。</p>
<p>24年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>インドにおける熱帯生態系と野生動物保全の研究を展開する基礎が固まると期待できる。幸島の直接指導する野生動物研究センターの3名の大学院生が、ドールとオオカミとゾウの研究をおこなう。これにはインド科学大学の強力な支援が得られる見込みがある。とくにスクマール・ラマン教授は、野生生物保全において国際的にもたいへん高名な研究者であり、かつ、今回の共同研究についてたいへん力強い支援をいただいた。したがって、5年計画の初年度に若手研究者による野外研究が進展すれば、今後、インドの他の地域や、他の大型動物に焦点をあてた研究についても展望が開けると期待できる。</p>

## 8-2 セミナー

—実施するセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「熱帯生物多様性研究国際セミナー」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “International Seminar on tropical biodiversity”
開催期間	平成24年9月15日～平成24年9月24日(10日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、京都、京都大学野生動物研究センター (英文) Japan, Kyoto, WRC, Kyoto University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授 (英文) Shiro KOHSHIMA・Wildlife Research Center of Kyoto University・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文)

### 参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	10/100
	B.	0/0
	C.	34/340
マレーシア 〈人/人日〉	A.	7/70
	B.	0/0
	C.	0/0
ブラジル 〈人/人日〉	A.	4/40
	B.	0/0
	C.	0/0
インド 〈人/人日〉	A.	3/30
	B.	0/0
	C.	0/0
合計	A.	24/240
	B.	0/0

〈人／人日〉	C.	34/340
--------	----	--------

- A. セミナー経費から旅費を負担
- B. 共同研究・研究者交流から旅費を負担
- C. 本事業経費から旅費を負担しない（参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。）

セミナー開催の目的	共同研究の一環として、生物多様性研究のための国際セミナーを日本でおこなう。実習形式のセミナーである。各相手国（マレーシア、ブラジル、インド）のフィールドワークで集めてきたサンプルについて、ゲノム解析、バイオリギングデータ解析、音響・画像解析などの実習を行う。相手国に派遣された学生やチューターには帰国後、中心になって来日者の世話や日本での国際セミナーの世話をしてもらい相互交流をさらに緊密化する。
期待される成果	日本で開催することで、相手国研究者に日本の研究の進展のようすを理解する機会を与える。共同研究のフィールドワークで集めてきたサンプルについて、ゲノム解析、バイオリギングデータ解析、音響・画像解析などの実習をおこなうことで、生物多様性研究に必須な技術を習得できる。
セミナーの運営組織	全体の総括をする代表者の幸島司郎をリーダーとして、若手研究者で運営組織をつくる。すなわち、各国研究者（3名ずつ、計9名）と、それに対応する日本側若手研究者（各国3名ずつ、計9名）が中心になって、それぞれの国情にあわせて協力した運営組織を作る。

開催経費 分担内容 と概算額	日本側	内容 国内旅費 800,000 円、 謝金 300,000 円 備品・消耗品費 700,000 円 、その他経費 200,000 円 謝金に係る消費税 15,000 円 合計 2,015,000 円
	(マレーシア・ブラジル・インド) 側	内容 外国旅費
	( ) 側	内容

## 8-2 セミナー

—実施するセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「熱帯生物多様性国際ワークショップ」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “International workshop on tropical biodiversity “
開催期間	平成 24 年 10 月 15 日 ~ 平成 24 年 10 月 24 日 (10 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) ブラジル、マナウス、国立アマゾン研究所
	(英文) Brazil, Manaus, National Institute of Amazonian Research
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎、京都大学野生動物研究センター、教授
	(英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto university, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Vera Maria Ferreira DA SILVA, National Institute of Amazonian Research, Professor

## 参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (ブラジル)	
	A.	
日本 <人/人日>	A.	12/120
	B.	4/40
	C.	0/0

マレーシア 〈人／人日〉	A.	4/40
	B.	0/0
	C.	0/0
ブラジル 〈人／人日〉	A.	4/40
	B.	0/0
	C.	0/0
インド 〈人／人日〉	A.	3/30
	B.	0/0
	C.	0/0
合計 〈人／人日〉	A.	23/230
	B.	4/40
	C.	0/0

A.セミナー経費から旅費を負担

B.共同研究・研究者交流から旅費を負担

C.本事業経費から旅費を負担しない（参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。）

セミナー開催の目的	共同研究の一環として、生物多様性研究のための国際ワークショップをブラジルでおこなう。各相手国（マレーシア、ブラジル、インド）と日本の研究者が一堂に会する。とくにアマゾンの現地でそれを行うことで、相互交流をさらに緊密化する。現地に建設する動物園・水族館というアイデアを、実際に現場で体験することで具体化する。
-----------	---

期待される成果	日本から研究者がブラジルに出向くだけでなく、マレーシアやインドからも参加することで、熱帯生物多様性研究のための4か国体制がより強固なものになると期待される。とくに、アマゾンではイルカやオマキザルといった熱帯生物多様性のフラグシップ種の生態保全研究とともに、現地につくる動物園・水族館構想が動いており、そうした新しい活動の現場を、インドやマレーシアからの参加者にも体験してもらうことができる。	
セミナーの運営組織	全体の総括をする代表者の幸島司郎をリーダーとして、また現地の受け入れ責任者であるダ・シルバ教授を共同責任者として、熱帯生物多様性国際ワークショップ運営委員会を組織する。具体的には、日本とブラジルで若手研究者（各国3名ずつ、計6名）が中心になっておこなう。	
開催経費 分担内容 と概算額	日本側	内容 外国旅費 3,600,000 円 備品・消耗品費 700,000 円 その他経費 300,000 円 外国旅費に係る消費税 180,000 円 合計 4,780,000 円
	(マレーシア・インド)側	内容 外国旅費
	(ブラジル)側	内容 会議費・国内旅費

### 8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

平成24年度は実施しない。

#### ① 相手国との交流

派遣元	派遣先	日本 〈人／人日〉	〈人／人日〉	〈人／人日〉	計 〈人／人日〉
	日本 〈人／人日〉				
	〈人／人日〉				
	〈人／人日〉				
	合計 〈人／人日〉				
② 国内での交流		人／人日			

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣時期	用務・目的等



## 9. 平成24年度研究交流計画総人数・人日数

### 9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人／人日〉	マレーシア 〈人／人日〉	ブラジル 〈人／人日〉	インド 〈人／人日〉	〈人／人日〉	合計 〈人／人日〉
日本 〈人／人日〉		8/480	16/360	4/240		28/1080
マレーシア 〈人／人日〉	4/120 (7/70)		(4/40)	0/0		4/120 (11/110)
ブラジル 〈人／人日〉	4/120 (4/40)	0/0		0/0		4/120 (4/40)
インド 〈人／人日〉	3/90 (3/30)	0/0	(3/30)			3/90 (6/60)
〈人／人日〉						
合計 〈人／人日〉	11/330 (14/140)	8/480	16/360 (7/70)	4/240		39/1410 (21/210)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。(合計欄は( )をのぞいた人数・人日数としてください。)

### 9-2 国内での交流計画

10/100〈人／人日〉
--------------

## 10. 平成24年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	800,000 円	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	9,000,000 円	
	謝金	900,000 円	
	備品・消耗品購入費	3,900,000 円	
	その他経費	905,000 円	
	外国旅費・謝金等に係る消費税	495,000 円	
	計	16,000,000 円	研究交流経費配分額以内であること
委託手数料		1,600,000 円	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		17,600,000 円	

## 11. 四半期毎の経費使用見込み額及び交流計画

	経費使用見込み額 (円)	交流計画人数<人/人日>
第1四半期	3,400,000	4/240
第2四半期	3,400,000	4/240
第3四半期	7,400,000	37/790
第4四半期	3,400,000	4/240
合計	17,600,000	49/1510